

和本のポテンシャル——教材としての古典籍利用の可能性



佐々木孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）

1 はじめに

私は、漢字文化圏の書物を研究対象とする、世界的にも珍しい研究所である、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に所属し、主に日本の古典籍（和本）について研究しています。和本は美術的な価値を有するものも多く、海外の図書館はもとより美術館や博物館などで所蔵されているものも少なくありません。それらの調査のための海外出張を行ってきましたが、所蔵先の方から和本についての説明を求められることが何度もありました。そうした経験を通して、和本が所蔵されている国々の方にも、和本について知っていただき、研究や教育にもっと活用していただきたいと考えようになり、現地の方々の協力を得て、ワークショップや講演会を開催してきました。新型コロナウイルスの流行のためにオンラインになったものも含めると、欧米を中心に八年間で約二〇回開催しています。

ワークショップを数回開催したところに、慶應義塾大学が、国際的な大規模公開オンライン講座（MOOC＝Massive Open Online Course）のプラットフォームである、イギリスに本部を置くFutureLearnに加盟することになりました。たまたま制作会議のメンバーに選ばれ意見を求められた際に、ワークショップの内容をもとにする和本のコースを提案してみたところ、それが認められ、リードエデュケーターとして制作に関与することになりました。完成した

2 和本の基礎知識

Japanese Culture Through Rare Books というコースは、二〇一六年七月から公開を開始し、現在に至るまで一七〇以上の国や地域の二五〇〇人超の方々が登録してくださっています。その続編として制作した、The Art of Washi Paper in Japanese Rare Books でもリードエデュケーターを務め、二〇一八年七月の公開以後、約七〇〇〇人に登録いただいています。

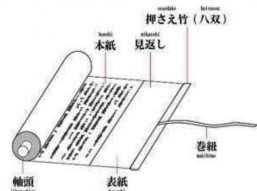
もちろん海外ばかりで活動してきたわけではなく、国内においても、中学生から大学院生・社会人を対象として、授業やワークショップ、講演会などを行ってきました。近年では、江戸川区子ども未来館のゼミ…結成ビブリオ団！の講師として、小学生に和本に触れてもらったりしています。このような経験を通して得られた知見をもとに、教材として古典籍を利用する方法などについて自分なりの考えを説明したいと思います。

日本ほど古くて多彩な書物が膨大に現存している国は他にないのでしょうか。水害や火災などが頻繁に起こる国であるのに、我々の身近にも古い書物は存在しています。神保町は世界最大の古書店街と言われますが、京都や大阪・名古屋をはじめ全国あちこちに和本を扱う古書店は存在しており、ネットショップやネットオークション上でも、和本は日常的に取り扱われています。日本人は書物を愛し、作り続け、大切に保存してきたのです。和本を知ることが、日本の歴史や文化、あるいは日本人そのものを知ることにもつながることは疑いありません。和本を教材として利用する方法は無限なのではないでしょうか。

和本を教材として活用するには、和本の歴史、和本の基本的な形態、使用された紙である料紙のことなど、和本に関する基礎知識を身につけることが望ましいと思われます。

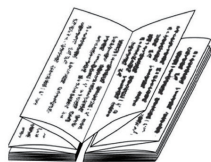
①巻子装 (かんすそう scroll)

単位: 軸



②折本装 (おりほん accordion book)

単位: 帖



③粘葉装

(でっしょうそう Pasted paper leaf book)

単位: 帖



④綴葉装 (てつようそう)

列帖装 (れつじようそう)

(multisection book) 単位: 帖



⑤袋綴装 (ふくろとじ pouch-binding)

単位: 冊



図1 基本となる装訂の5種類

和本の特徴は、これら五種の装訂が同時並行的に用いられた期間が長かったことにあります。それは装訂が書物製作の目的に応じて使い分けられていたことによると考えられます。装訂とそこに保存される内容を調べると、装訂にはヒエラルキー（階層）が存在したことがわかります。特殊な用いられ方をした②折本装と、鎌倉中期以降あまり用いられなくなる③粘葉装を除外して考えると、最も格が高いのは①巻子装で、以下④綴葉装・⑤袋綴装の順になると思われます。また綴葉装内でも、長方形の四半本の方が、正方形の六半本よりも格が高いことは明らかです。

勅撰和歌集が下命者に奏覧される際には、巻子装で製作される慣例があったことは、巻子装の権威を端的に示す事例です。その巻子装には、詩歌や歴史物語等は保存されるのですが、作り物語や歌物語は基本的に保存されませんでした。紫式部は『源氏物語』を書いたために地獄に堕ちたとの説話が、平安末期には成立していた事実は、虚構である作り物語の当時の社会的地位の低さ

六世紀半ばの仏教伝来は書物の伝来でもあるとか、日本人最古の書物は、聖徳太子が推古天皇二十二年（六一四）から翌年にかけて書いたとされる『法華義疏』であるとか、推古天皇一八年（六一〇）に、紙と墨の作り方をしている高句麗僧曇徴が来日したとか、奈良時代に日本各地で渡された紙が正倉院に残っているとか、最古の印刷は宝龜元年（七七〇）に完成した百万塔陀羅尼であるとか、書物の出版は『御堂関白記』寛弘六年（一〇〇九）一月一日条に見える千部の法華経が記録の初例であるとか、刊行年の明らかな現存最古の本は、寛治二年（一〇八八）の『成唯識論』であるとか、日本人による活字印刷は文禄二年（一五九三）の『古文孝経』が最初だが現存していないとか、多色刷りの印刷は明和二年（一七六五）ごろから始まったなど、生徒や学生から質問されそうな、日本の書物史の基本的な事項は、抑えておいた方が望ましいのではないのでしょうか。

この他にも、和本に関する基礎知識として、理解しておいた方がよいのは、基本的な装訂の種類でしょう。和本は、東アジア諸国の書物の中で、装訂や大きさや形、表紙の色やデザインなどが、多様であることに大きな特徴があります。そうなった大きな理由として、他の国々では版本が書物の中心であったのに対し、日本では印刷技術が伝わった八世紀以降も、写本の時代が長く続いたので、多様性を保ちやすかったことが考えられます。

和本の基本的な装訂は五種類あります。漢字の音読みに、時間差をもって日本に伝わった、呉音（六朝の呉）・漢音（唐）・唐音（宋以降）があるように、その時々最新の知識を保存した書物が大陸から日本に伝来した際に、書物の作り方も伝わって日本で用いられるようになったのです。その五種とは、①巻子装・②折本装・③粘葉装・④綴葉装（列帖装）、⑤袋綴装です。

ここでは構造を示す図を提示するにとどめて「図1」、詳しい説明は省略しますが、簡単にこれらの特徴を整理すると以下のようになります。①〜③は紙をつなぎ合わせるのに糊を用い、④と⑤は紙に穴を開け、紙縫りや糸で綴じるものです。③〜⑤は冊子本と呼ぶうるもので、③・④は紙の両面を用いるもの、①・②は裏面を用いることもできる

を物語っています。

綴葉装の四半本と六半本に保存される内容を、鎌倉時代に限定して比較してみると、卷子装にもなる歌書類は、四半の方が六半より圧倒的に多いのに対し、絵巻という特例を除き、卷子装にならない作り物語は、六半の方が四半より断然多いことが確認できます。また同じ歴史物語でも、『栄花物語』は六半が目立つのに対し、『大鏡』は四半ばかりで六半が確認できないという違いが確認できます。これは『大鏡』の方が『栄花物語』よりも物語性が薄く、史書に近いことと関係すると考えられます。こうしたことから、四つ半本の方が六半本よりも格が高いと判断できるのです。

また綴葉装と袋綴装の内容を、室町時代以前に限定して比較してみると、『源氏物語』や『伊勢物語』は圧倒的に綴葉装が多く、軍記物語は袋綴装の方が断然多いことが判明します。文化圏や受容層の違いに起因する傾向かと考えられますが、綴葉装の方が袋綴装よりも格が高いことが理解できるのです。

このような傾向を確認していくと、装訂の選択には、法則的なものが存在していたらしいことが浮かび上がってきます。そうした書物に関する法則の一つの例として、鎌倉時代の書道伝書に見える、表紙の題名である外題の位置に関する決まりを上げることができます。歌書は左肩に、物語は中央に書くというもの〔図2〕で、公家文化を伝える書物では、江戸時代になっても守られることが多かったことも判明しています。この位置の違いが何を意味しているのかを考えると、卷子装の外題の位置が



図2 和歌集(右)と物語(左)の写本の表紙(共に17世紀のもの)。以下、所蔵先の明記がないものはすべて架蔵。

関係していることが理解できます。卷子装の表紙を広げて裏から見ると、外題は左肩の位置になります。つまり外題が左にあるものは、卷子装に保存されうる内容で、真ん中は卷子装に保存されない内容であることを示していると考えられるのです。

書物が単なる文字や図絵などのテキストを保存するための道具ではなく、当時のさまざまな情報を保存したタイムカプセルであることを、以上のような情報からも理解していただけるのではないのでしょうか。教材としての活用法が無限であるというのは、こうした理由からなのです。

3 教材としての和本の選択

和本を教材に利用する際に悩ましいのが、どのような和本を用いるのかという問題でしょう。選択肢が多すぎるのも困りものです。教科書にもよく取り上げられる『伊勢物語』の和本を使用するとして、手元に使用可能な和本があるのならば悩まなくてもよいかもしれませんが、画像を利用することだと候補があまりにも多いのです。

貴重な図書の画像のデジタル公開は、世界的な流行ともいえる状況にあり、すさまじい勢いで日々その点数は増え続けています。世界中で発信される日本文化に関する情報一〇〇万件を検索できる「Cultural Japan (カルチュラル・ジャパン)」や、書籍・公文書その他の日本が保有するさまざまな分野のコンテンツのメタデータを検索できる「ジャパンサーチ」、複数の機関が所蔵する古典籍の情報を一度に検索できる、国文学研究資料館の「国書データベース」や、立命館大学アート・リサーチセンターの「ARC古典籍ポータルデータベース」、東京・京都・奈良・九州の四国立博物館と奈良文化財研究所の所蔵品を検索できる「CoBase (コルベース)」などの、横断検索システムや、国立国会図書館や早稲田大学図書館などで公開されているデジタルコレクションなど、国内に限っても選択に困るほどの検索



図4 万延2年(1861)錦昇堂(恵比寿屋庄七)刊、楽亭西馬訳・歌川芳虎画『弓張月春遊雲采』
19編の表紙と本文

和本はくずし字のテキストとなるだけではありません。保存されたさまざまな情報を取り出すことによって、国語のみにとどまらない、多くの教科で利用することも可能なのです。

江戸時代前期の一七世紀には、大名家の姫君の嫁入り道具として作られたと思われる豪華な写本が目立ちますが、中期の一八世紀になると急に少なくなります。これは参勤交代やお手伝普請、米価下落などによる、江戸中期以降の藩財政の逼迫が関係するのかもしれませんが。

4 和本は歴史の生き証人

ともかくも、くずし字を読みたいという気持ちをもってもらうことが大切です。ですので、そういう気持ちをかき立てそうな和本を導入部で紹介するのがよいでしょう。今日世界的に人気のある日本の漫画ですが、江戸時代の絵入り版本を眺めていると、漫画がこんなにも発達したことも理解できるような気がします。特に草双紙の最終形態である「合巻」などは、見た目や内容的にも漫画の直接的な先祖といえそうなほどです。くずし字のテキストとしては上級者向きとなりますが、くずし字が読めるようになるとこんな本も楽しめるようになるよと、楽しそうな合巻を紹介する「図4」のもよいのではないのでしょうか。

おけるICT(情報通信技術)環境の急速な整備によって、かつては不可能であったり準備が大変であったりしたことが、簡単に実現できるようになったのです。

デジタルのみでは味気ないのは確かです。実際に触れた方が楽しく、興味も増すのは疑いありませんが、読む対象とするものと、手で触れるものが同じ作品である必要はないと思います。極端な例ですが、何も書いていない新しい和紙をさわるだけでも、質感をイメージするのに役立つのではないのでしょうか。

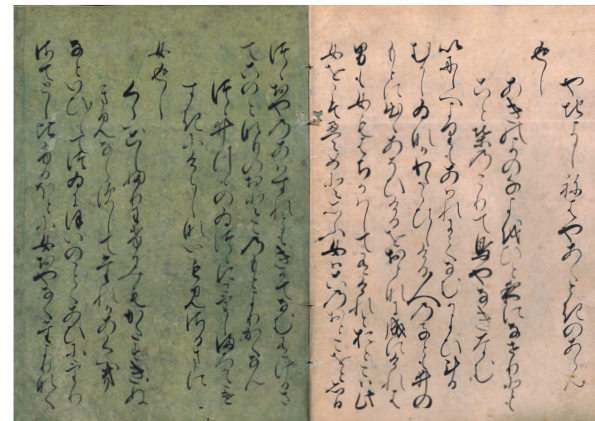


図3 15世紀後半 伝平田墨梅写『伊勢物語』

方法があります。海外のサイトで公開されている和本も少なくなく、欲する情報にたどり着くのにローマ字検索が効率的だったりします。

これらを活用して、利用できる『伊勢物語』の候補を探すとちよっと信じられない数になります。そこから絞り込むのも大変な作業です。そもそも写本を利用するのか版本にするのか。対象となる学年や目的によって、選び方は当然変わってくるでしょう。どちらにも内容理解の助けになり、親しみを感じさせる挿絵入りのものがたくさんあります。個人的には、くずし字の基礎を学ぶには、室町時代に文字の上手な公家やその周辺の人物が写したものが適しているように思います「図3」が、版本は句読点的なものや濁点が入った読みやすいものも少なくありません。一つに絞るのではなく、さまざまな本の同じ箇所を比較しながら用いるのも、多くの発見をもたらし、理解を深めるのによい方法だと思います。豪華な写本の極彩色の挿絵と、版本の墨線のみ挿絵を比較するのも楽しいと思います。新型コロナの流行の副産物ともいえる、教室に



図6 江戸前期刊 吉田光由編『塵劫記』



図5 1593年刊 天草版『平家物語』(大英図書館蔵)

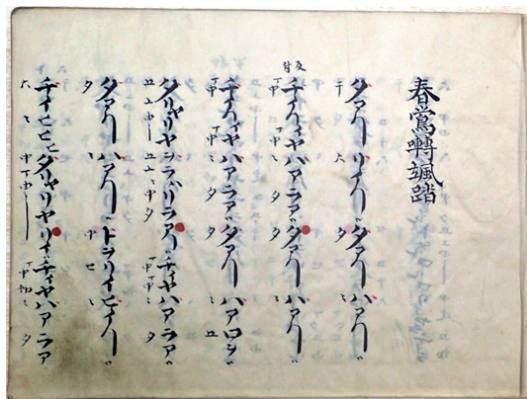


図7 江戸中期写『龍笛仮名案譜』

は、江戸時代の大ベストセラーだった、吉田光由編の『塵劫記』が最適でしょう。大変多くの種類がありますが、江戸前期のものは挿絵がかわいくてとても親しみやすいと思います〔図6〕。▲三里有みちを三人にて馬式足にのる時なん里づゝのるぞ」などの簡単な問題もあります。問題を実際に解かなくても、何百年も前の日本人が、このような本で算数を学んでいたと知るだけでも、学習意欲を刺激してくれるのではないでしょう

うか。

学習に大切なのは、それを学びたいと思う意欲だと思いますが、そういう気持ちを起こさせるきっかけとして、和本は利用できると考えるのです。音楽の時間に西洋音楽の楽譜について説明する際に、雅楽で使

あるいは、同じ作品の版本なのに、表紙がモノトーンのものカラフルなものとの二種あるものが存在していたりします。山東京山作・歌川国芳画の『朧月猫の草紙』三編がその例です。その刊行年を調べると、モノトーンのは天保一六年(弘化元年(一八四五))で、カラフルなものは弘化四年と、三年の差があることがわかります。元号を見るとピンとくるかと思いますが、これは幕府財政の健全化を目的として、老中水野忠邦によって天保一二年から翌年にかけて行われた、いわゆる天保の改革の影響による変化であると考えられます。

これ以前の松平定信による寛政の改革の影響で、勸善懲惡の物語が増えることもよく知られています。和本を通して幕政改革が庶民に与えた影響を、具体的かつ視覚的に感じることもできるのです。日本史の授業などでの利用も可能なのではないのでしょうか。

ローマ字は小学校三年生で習うようですが、その際に大英図書館に所蔵される、一五九二年に天草で刊行された『平家物語』の画像を見たらというのはいかがでしょうか。国立国語研究所が提供している、デジタル画像を利用することが可能です(https://dgb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/)。見るからに西洋の書物然として、すべてアルファベットで印刷されているのに、読めるばかりではなく、内容を理解することができるとに興味を持ってもらえるのではないのでしょうか。例えば扉部分〔図5〕の横文字は、カタカナに直すと、「ニホンノコトバトヒストリアヨナラ

イシラントノホッスルヒトノタメニセウニヤワラゲタルヘイケノモノガタリ」と印刷されています。小

学生には難しいでしょうが、こんなに古くからローマ字があることを知るのには、無意味なことではないでしょう。より上級生に向けてということになりますが、「FEOE」とあることから、ハ行の発音が現在と異なっていたという、国語学的な知識につながることもできますし、ローマ字の訓令式とヘボン式の違いの説明にも利用できるかもしれません。

文系の科目ばかりではなく、理系の科目で和本を利用することもできるのではないのでしょうか。小学生向きとして

てもらうのもよいかもしれません「図7」。両者の違いを通して、東西の音階の違いについて学んだりできるのではないのでしょうか。視覚的な刺激は理解を進めるのにもきっと役立つはずです。

内容によっては、地域教育にも活用することが可能でしょうし、和本に用いられた和紙は江戸時代には全国的に生産されていたので、身近な産地について学んでみるのもよいかもしれません。全国手すき和紙連合会のホームページで公開されている、「全国産地マップ」は参考になります。

保存されている内容が多岐にわたっているのも、どんな教科でも何らかの接点を見つけることはできるのではないのでしょうか。あまり限定して考えず、教える側も和本に親しみながら、楽しく教材として使えるものを見つけていけばよいのではないのでしょうか。

5 おわりに

和本は日本の貴重な文化資源です。日本ほど古い書物が豊富に存在する国は他にないのです。書物は文化のタイムカプセルであり、保存された文字や絵画の情報だけでなく、物質としての存在自体に膨大で多面的な情報が保存されているのです。そのことを理解することは、子どもたちの将来の仕事や学問、あるいは生活において、きっと役に立つはずです。授業の教材として和本に触れることは、その教科の学習意欲や探求心を増すことはもちろんのこととして、人として幸福に生きていくための知恵を育てることにもつながるのではないのでしょうか。日本の書物文化を知っていることが、国際社会で活動する上で役に立つことは、私が身をもって経験しています。

和本は日本の教育を楽しく豊かにし、ひいては日本の社会や文化に憩いや潤いをもたらす存在だと確信しています。どうぞそのポテンシャルを存分に引き出してみてください。

実践1

貴重書出前授業が伝えてくれたこと

 近江弥穂子（横浜市立あざみ野第一小学校）

1 はじめに

体験することが少ない今の児童にとって、学習する際に自分事として捉えたり、自分に近づけて考えたりすることはなかなか難しいのが現状です。授業支援で、模造紙で作った巻物を児童に紹介しながら、「ここで本物の巻物を児童に提示することができたら」と常々思っていました。くずし字の授業支援でも、写真ではなく、くずし字が書かれている実物が目の前にあれば教育効果が大きいのではないかと考えていました。そんな折、普通であればガラスケース越しでしか見るできないよう

な和本に児童がじかに触れることができ、また『解体新書』などの貴重書を間近に見られる授業が鶴見大学からのご支援で可能となりました。これは児童にとって得がたい体験となり、大きなチャンスでもあります。ここでは国語のくずし字の学習と貴重書出前授業についてご紹介させていただきます。

2 くずし字学習について

横浜市では六年生で、「仮名の由来」という一時間の単元でくずし字の学習をします。この単元では、①仮名の由来、特質などについて理解することができ、②先人たちが工夫を重ね継承してきた文字や表記を児童たちが大切に考え、未来に伝えていこうとする態度を持つことができ、③の二点が指導目標です。実際、学習後の児童の感想には、「自分の名前をくずし字で書くのが面白かった」、「由来が知れてよかった」、「読めて、意味がわかりそうで、なんかかっこいいと思う」等がありました。授業後にはテストも含めて自分の名前をくずし字で書く児童もいたようですが、指導目標の②にあるよう